

黒島と『私は忘れない』

梁川英俊

鹿児島大学法文学部

Kuroshima Island and “Watashi ha wasurenai (I will never forget it)”

YANAGAWA Hidetoshi

Faculty of Law, Economics and the Humanities, Kagoshima University

要旨：黒島は作家・有吉佐和子の小説『私は忘れない』の舞台である。この小説は発表の翌年に映画化され、黒島の名を日本中に知らしめた。島にはそれを記念する文学碑がある。小説の末尾には、島の人々がテレビによって変わっていく様子が描かれているが、実際に島にテレビを寄贈したのは他ならぬ有吉であった。この小説が黒島に与えた影響を把握するために、関係者への聞き取り調査が必要である。

当初は加計呂麻島調査の予定であったのが、悪天候で目的地が黒島に変わり、その結果黒島にはほとんど予備知識なしで調査に入った。わずか1日の滞在であったため、車で島を一周し、大里集落内を数時間歩いただけであったが、大里小・中学校を訪問した際、幸運にも校長の徳森孝一先生をはじめとする教職員の方々と懇談する機会を得た。

大里小・中学校は有吉佐和子（1931-1984）の小説『私は忘れない』の舞台である。校門の傍らには「小説『私は忘れない』舞台校」と書かれた看板が掲げられ、詳しい説明が書かれている。「大里ふるさとセンター」の入口の前にも、有吉佐和子の自筆による「私は忘れない」の文字が刻まれた文学碑がある。平成4年の建立とあるが、なぜそれが建てられたのか詳しい経緯は分からない。碑に書かれている説明には、昭和34年にこの小説が書かれ、翌年映画化されて黒島の名が知られることになり、「島興しの機運が高まった」ので、その功績を称えるために建立したとある。

私は不覚にも黒島に来るまでこの小説の存在を知らなかった。だからこの文学碑についても、最初は単なる観光スポットなのだろうと思っていた。ところが、その後いろいろと調べるうち、この小説が島に与えたインパクトは思いのほか大きなものであることが分かってきた。以下は、その途中報告である。

『私は忘れない』は昭和34年8月16日から12月18日まで朝日新聞に連載された。作者・有吉佐和子が28歳のときである。主人公は門万里子というスターの卵。映画出演という格好のチャンスを逃した彼女は、傷心のまま偶然手にした写真集で知った黒島へと旅立つ。小説は、そこで彼女が僻地教育に力を注ぐ教師たちや島の素朴な人々と触れ合いながら生きる力を回復し、新たな気持ちで人生に臨むようになるまでを、黒島の自然や風

俗を織り交ぜながら肯定的に描いている。

有吉が初めて黒島を訪れたのは、連載の前年の昭和33年8月。翌月の『婦人公論』に発表されたルポルタージュ「『姥捨島』を訪ねて」の取材が目的であったが、この小説の構想もおそらくそのときに生まれたのだろう¹。三島村役場には、笑いながら牛に乗って移動する有吉の楽しげな写真が残されている²。昭和31年に「地唄」で芥川賞の候補になって以来、流行作家として多忙をきわめるなかでの旅であった。主人公・万里子が牛に乗って山道を進む場面はこの小説のなかでもとりわけ印象的な場面だが、島でさまざまな経験を積みながら人間性を回復していく万里子の姿は、おそらく幾分かはまた作者自身のそれであったに違いない。

ところで、離島での経験で成長する都会の女性の物語として要約されることが多いこの小説のなかで、変わっていくのは主人公の万里子ばかりではない。そこでは島民もまた変化する存在として描かれている。しかもその変貌ぶりは、万里子のそれをはるかに上回る劇的なものなのである。きっかけとなるのは一台のテレビである。

東京に戻った万里子は、ある化繊メーカーからコマーシャルの仕事を依頼される。女優への夢をあきらめきれぬ彼女は、揺れる心を落ち着かせるかのように黒島の生活について語り始める。その熱弁に動かされたメーカーの社長は、この僻遠の地にテレビを贈ろうと思いつく。小説『私は忘れない』の最後の数ページは、もっぱらこの「文明の利器」が島民に与えた影響に割かれている。

「テレビが、これほど島に革命をもたらすとは誰も考えなかった。夜になるのを、人々は楽しく待ち始めた。それは昼の労働を活潑なものにした。(……)

十年口を酸っぱくして説いても、体操の時間に足をあげなかった女の子たちが、バレエの放送を見ると考え直して、放課後のリズム体操にも積極的に参加するようになった。

ラジオでは標準語を聞いたり学んだりする気を起こさなかった者たちが、テレビドラマを熱心に見て、知っていることを理解しようとしていた。極端に男尊女卑の国であった黒島で、恐妻一家のドタバタ喜劇が大評判で迎えられ、女性の意識は目に見えて向上してきた。料理の時間、画面に現れる人々の風俗を見て、島は文化について真剣に考え始めた。前には教員が率先指導していた事柄が、島の人々の自発的な意思によって始められようとしている。(……)

星島校長は、自分の十年間の教育の成果と等しいほどの進歩が、テレビによって、わずか数日のうちになされたのを驚かないわけにはいかなかった。大里の人々の言葉が変わってきた。身なりが変わってきた。もう来年の夏には、上半身を裸にして歩く娘はなくなるだろう。子供のある家では、子供に靴を買うために、竹を刈っては貯金を始めている。子供たちは雨の日に、ビロウの葉をかぶって登校したのに、コウモリ傘というものがあるのを知ってからは、それをめざして、銘々に貯金を始めた。(……)

子供たちは、社会の時間の学習を待ちかねていた。汽車と自動車の区別がはっきりとついたから、絵をかかせても自動車に煙突がついて、そこからモクモク煙が出ているような絵を描く子供はいなくなった。君雄も、教壇で立往生することは滅多にない。

「百聞は一見にしかず、とはテレビのことでしたな」

教頭が例のへキを出して肯いている。

島の中には「文化」という言葉が、合言葉のように生まれていた。幾百年の生活の情

¹ 井上謙、半田美永、宮内淳子編 『有吉佐和子の世界』2004年、翰林書房、p.152.

² 「黒島と有吉佐和子」(<http://www4.synapse.ne.jp/mokka/bungakusanpo/ariyosi-kurosima/ariyosi-kurosima.htm>)

性を、打ち切らねばならないという強い決意が、そこには漲っていた。豊作について、もっと文化的に考えようじゃないか。生活も、もっと文化的に……それは三十年ほど前の日本で科学的という言葉が流行したときと似ていた。³」

日本におけるテレビ普及率は、この作品が書かれた昭和34年では約2割である。もっとも昭和30年代はテレビの普及率が飛躍的に伸びた時代で、その数字は昭和38年には早くも7割近くに達している⁴。ラジオやテレビといった放送メディアが国の近代化や国民統合に果たした役割はきわめて大きく、ここに描かれているような風景は、黒島にかぎらず当時の日本の田舎のあちこちで見られたはずである。

では、実際に黒島に初めてテレビが来たのはいつなのだろうか？

こうした疑問を抱きながら黒島で撮影した写真を眺めていた私は、大里小・中学校の校長室の壁に貼られた「学校の沿革の概要」を写した一枚のなかに意外な答えを見つけた。そこには昭和33年8月6日の出来事として、こう書かれていた。「有吉佐和子女子の努力により、一七インチのテレビセット導入、テレビによる学校放送開始」。

驚いたことに、黒島に初めてテレビを贈ったのは、作者・有吉佐和子その人だったのである。しかもその日付から推測するに、このテレビは彼女が取材で黒島を訪れたときに一緒に運ばれてきた可能性が高い。つまり先に引いた小説の記述は、有吉自身が実際にその目で確認した事柄だったのではないかと考えられるのである。そうでなくても、東京に戻った有吉のもとには、彼女が贈り物が島の人々にもたらした影響を語る声が少なからず届いていたであろう。小説はテレビが島にもたらした諸々の影響を最初から知った上で執筆されていたのである。

この「学校の沿革の概要」は次のように続く。「昭和33年11月1日 NHK放送局より大型トランジスタラジオ一台寄贈学校放送の利用が活発となる」。どうやら有吉の来島をきっかけに、島には一種の「メディア革命」が起きたらしい。

翌々年の昭和35年5月には、映画のロケ隊がやってくる。「学校の沿革の概要」にはこうある。「松竹ロケ隊『私は忘れない』の現地ロケ実施児童生徒も特別出演、松竹会社から時鐘自転車その他が寄贈される」。さらに同年6月の出来事として、「小学校四・五年生五名が松竹会社から東京見物に招待され、竹島校長引率のもとに上京各方面から義援の金品を受ける」。島を舞台にした一篇の小説は、こうして終戦後しばらくは住民の7割が鹿児島さえ知らなかった島の子供たちを、日本の首都にまで連れて行ったのである。

『私は忘れない』のなかで、島で生まれた人々の言葉がそのまま会話として登場することは稀である。主人公・万里子と親しく話を交わす人々は、大里小・中学校の校長、教頭、教職員をはじめ皆本土から来た人間ばかりである。この時代の島民の会話がすべて土地の言葉で行われていた以上、これは仕方がないことかもしれない。作中、万里子に初めて黒島の存在を教えた書物としてタイトルが引かれる岩波写真文庫『忘れられた島』にはこうある。「この島の方言はまったく理解に苦しむ。こちらの標準語は通じるようだが、先方様の言葉は通訳に頼むより手がない⁵」。こうした状況のなかで、この作品はテレビを通じて「文化」に触れた島民たちが、やがて他の日本人に対して発信する「言葉」を持つようになるだろうという明るい予感のうちに結ばれる。

³ 有吉佐和子 『私は忘れない』新潮文庫、昭和44年、pp.288-292.

⁴ 「戦後昭和史—NHK受信料と放送普及率」(<http://shouwashi.com/transition-nhk.html>)

⁵ 岩波書店編集部 『忘れられた島』岩波写真文庫 復刻ワイド版、2008年、p.29.

作者は、小説の最後に置かれた島の校長先生に宛てた手紙のなかで、万里子にこう語らせている。「私は今、私のために、黒島を忘れるまいと思っています。歯車がギリギリと音をたてて回っているような都会で、コンベアに乗せられてスルスルスルと時間を空費してしまいそうな気のいい若者たち、みんなが島を忘れずにいれば、きっと私たちは間違いを起こさずにすむと思います。⁶」

実際、『私は忘れない』の執筆後も、有吉は離島に関心を寄せることをやめなかった。その証拠に、1984年に53歳で急逝した彼女がその数年前に出版した大部のルポルタージュは、『日本の島々、昔と今。』と題されていた。その意味で、有吉は文字通り黒島で得た問題意識を生涯「忘れなかった」と言えるだろう。

では、黒島の人々はどうなのか？「私は忘れない」の文字が刻まれた文学碑は、彼らもまた有吉を忘れてはいないことを示している。その彼らはこの作品がきっかけとなって起こった変化を、いまどのように語るのだろうか？ テレビが島にもたらした影響を語る有吉の記述のなかに、かつての自分たちの姿を認めるだろうか？ 松竹から招待されて東京に行った子供たちは、生きていればすでに60歳を超えている。彼らはその経験を、あるいは「新旧」の時代の変化を、どのように回想するだろうか？ 黒島の〈近代化〉の過程を知るためにも、その声を集めることが今後の課題として残っている。

⁶ 有吉、前掲書、p.295.



写真1. 「私は忘れない」の文学碑



写真2. 大里小・中学校校門横の説明板